

二〇一九年三月の「森三郎の作品を読む会」では「森三郎童話選集かささぎ物語」(1995年、刈谷市教育委員会)所収の「山彦」「雪ごんごんお寺の柿の木」を読みました。

「山彦」「雪ごんごんお寺の柿の木」はいずれも、一九四三年十二月発行の単行本『雪ごんごんお寺の柿の木』(泰光堂)に書き下ろしの作品です。一九三六年の『赤い鳥』終刊から七年後の作品集です。

「山彦」は明日見山という高い山の麓の村に住む長者と娘の乙姫の話です。父親は娘にいい婿を取って隠居したいと思いますが、娘の乙姫は毎日好きな琴を弾いて暮らし、多くの男たちの求婚もことわり、誰とも婚約をしようとしません。しかし、父親のたつての願いに折れ、明日見山に住むという炭焼きの山彦となら結婚してもいいと言います。そこで大勢の召使が山彦を迎えに行きますが、山の峰深く行っても炭焼きの煙にたどり着けず、声をかけてもこちらのことわりを繰り返すばかりなので、空しく帰って来ます。すると乙姫は「あの人は、面倒な人間の世をさけて姿を見せないのにながいありません。」と言って、自分から山彦の所へ出向くことにします。父親は婿を取れとせめたてたことを後悔しますが、あきらめてお嫁入りの支度を調べ、娘を明日見山に送り出します。その後、父親は明日見山を一人で尋ね峰に向かつて「達者でお暮らし」と叫ぶと、「達者でお暮らし」と同じ声がかえってきました。

読んでいくと「山彦」という名前の意味が分かります。五人の熱心な求婚者たちに功利的なけがらわしさを感じて拒む乙姫の気持ち、高い山の頂からいつも炭を焼く煙が立ち上る状況などは『竹取物語』を意識して物語が構成されていることを感じさせます。古典にヒントを得ながら、つかず離れず、人間の幸せについて考えさせられる作品です。

「雪ごんごんお寺の柿の木」は山のお寺の小坊主が柿の木に上って柿の実を食べていたところ、ちょうど通りかかった大名行列のお馬の上に落ち、若君の弟君として暮らすという滑稽話です。若君になるまでに三回のとり替えつこがリズムよく描かれています。若君になった小坊主がお供のものを従えてお寺にやって来ますが、和尚さんは「お城へお遊びに」という小坊主からの誘いを断ります。物はなくてもやはりお寺での自由な暮らしがいいと、小坊主はお寺に戻ってきます。雪の降る庭の柿の木を見て「柿の木はやっぱり柿の木ですね」と、懐かしそうに当たり前のことを言う小坊主に、和尚さんは嬉しくなりました。

これまでこの作品を、身近な当たり前のところに幸福があるということと考えさせられる作品だという評価をして読んできました。しかし何回も読んでいくうちに、表現の軽妙さを作者は楽しんでるように感じてきました。それは登場人物の名前(乳母の重の井、馬の指南役伊達与作)を人形浄瑠璃『恋女房染分手綱』から採ったり、言葉遊びを使っていたりするところにも表れています。『赤い鳥』を離れた後の森三郎の作品には、滑稽を主眼とする傾向がみられますが、それも『赤い鳥』時代に無署名で書いた「昔の笑ひ話」の延長線上の成果とも言えそうです。

◆『かささぎ通信』第79号として「新元号特別版」を出しました。新元号「令和」は『万葉集』の巻五「梅花の歌三十二首 序を并せたり」の「序」の部分に典拠があると発表されました。『赤い鳥』昭和八年一月号に掲載された森三郎の「梅の木」はその歌三十二首の内、四番目の山上憶良の歌を題材にした作品であったことを紹介しました。

予告「第7回 森三郎に親しむ集い」

日時 二〇一九年六月二日(日曜) 午後一時半~三時(受付一時)

会場 刈谷市中央図書館 三階 大会議室(自由席二百人)

森三郎童話紙芝居十作目の「赤鬼青鬼」を上演します!

次回「森三郎の作品を読む会」

二〇一九年五月十日(金) 午後一時半~三時半

『雪』三條中納言 『森三郎童話選集 夜長物語』